

A・コルビック『カミュ—不条理，反抗，愛』

古野，千恵

<https://doi.org/10.15017/8795>

出版情報：Stella. 23, pp.147-150, 2004-12-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



A・コルビック『カミュ——不条理，反抗，愛』

古 野 千 恵

周知のようにアルベール・カミュは、不条理の世界に生まれた人間が担うべき真の役割とは生きること、すなわち不条理に対する反抗と自由の意識を持つことである、と訴えつづけた。彼の作品の総体は不条理への反抗であり、その構築はつぎのように段階的におこなわれた¹⁾。まず作家が主題にすえたのは〈拒絶〉である。〈不条理〉を意味するこの拒絶は『異邦人』『カリギュラ』『誤解』『シーシュポスの神話』において具現化されている。しかしカミュは人間が拒絶のなかでは生きられないという不可能性を熟知していた。それゆえ彼は、拒絶を超克するために〈反抗〉の理念を掲げ、『ペスト』『戒厳令』『正義』『反抗的人間』の4作品を通じて人間には不条理を耐え忍ぶことができないことを実証しようとしたのである。かかる創作の総括となるはずだったが、〈愛〉を主題にした作品であった。本著『カミュ——不条理，反抗，愛』²⁾においてアルノー・コルビックは、〈不条理〉からの脱出口として〈反抗〉から〈愛〉へと展開するカミュの作品の骨子を検討し、その哲学的思想を体系的かつ明快に我々の前に提示する。

まず同書は、カミュが「無神論的人間主義^{ユマニスム}」を確立する経緯をたどることからはじめる。序文においてコルビックは貧苦と光の世界を生きた作家の生涯について触れた後、人間主義者と呼ばれることを拒否した彼が、いかにして神の存在という問題と対峙し、自身の人間主義の基盤を練り上げたすえに、無神論の立場をとるにいたったのかを検討することで、カミュの哲学的な企図の背景を明らかにする。

こうした考察を踏まえて第1章では、カミュの哲学的創造の第1段階である〈不条理〉の分析がなされる。コルビックは、作家が不条理を受け入れながら、いかにして虚無主義の障害を回避し、神なき人間主義の確立を試みたのか、という問題を起点にして〈不条理〉の内容を掘り下げていく。まず俎上にあがる

のは、サルトル的不条理とカミュ的不条理との相違点である。前者は存在論の類で、例えば『嘔吐』のロカンタンが抱くような「自己がこの世における〈余分なもの〉である」という認識から生まれる。いっぽう後者の理論は以下のように説明される。自分が確かに存在するという確信を人間がもっていても、存在の確実さを定義する唯一の真理は世界に存在しない。ゆえに人間は「自己が自身にとって〈異邦人〉である」と感じるのだが、この孤独感のなかにこそカミュにとっての不条理は存在する。以上の観点からコルビックは、両者の不条理は一致しないと強調しつつ、作家が『シーシュポスの神話』において自殺の問題やシーシュポスを主題に据えたのは、存在の不合理性——人間が物理的には死によって、精神的には希望によって逃れようとする不合理性——の問題だからであると指摘する。これらの分析を踏まえてさらに著者は、作家の哲学的思考が不条理に立ち向かうための〈反抗〉へと進展する過程を明らかにする。ここでとくに強調されているのは、一連の思想展開が自殺を拒否する3つの帰結、すなわち「反抗」「自由」「情熱」に出会ったことで可能になった点である。

第2章で考察されるのは、カミュの思想生成の第2段階となる〈反抗〉である。前章では個人の自殺の問題を対象とした『シーシュポスの神話』を中心に論じられていたが、本章では殺人を主題に据えた『反抗的人間』が分析の対象となっている。反抗とは少なくとも表面上は直ちに人間主義や価値を意味するものではない。また不条理に対する反抗には、それを正当化する根拠が与えられるべきで、新たな不条理や殺人に固執すべきものではない。カミュは不条理と闘うためには個人を孤独の感情から連帯の意志へと導くような生への深い同意・承諾が不可欠であると考え、新しいコギト「我反抗す、ゆえに我らあり」を導き出した。カミュが形而上的反抗と呼ぶところのものや、サルトルとの論争のきっかけとなった〈反抗〉の原理について焦点を当てつつコルビックは、カミュの〈反抗〉に認められる人間主義は『シーシュポスの神話』において大筋が立てられ、それから『反抗的人間』において社会的・政治的なかたちで展開した、と結論づけている。

第3章でとりあげられている〈愛〉は、カミュが『手帖』や『反抗的人間』において、また1957年のストックホルムでの演説でも明言したように、不条理や反抗にかんする考察につづく創作の最終段階のテーマとなるはずだった。作家は〈愛〉についての考えを哲学的に練り上げる前に逝ってしまったが、コル

ビックは初期の2作品『裏と表』『結婚』、遺稿となった『夏』『追放と王国』『最初の人間』などが、〈愛〉をめぐるカミュの思考を理解するための貴重な指標だとする。そのうえで彼はカミュ作品における愛の哲学をつぎのように分析してみせる。『反抗的人間』のなかで「反抗には奇妙な愛が必ずともなう」と主張していたように、作家は反抗の拠り所を愛——生、人間、大地への最初で最後の同意——のなかに見出していた。愛だけが虚無主義や生の享樂のなかで反抗が力を失うことを妨げるのだ、と。つづいてコルビックは『結婚』に考察を移す。彼によれば、作品の中心テーマは〈大地への愛〉、すなわち別の生を希求したり、現実の世界から逃避しないという態度であり、かかる思想の基底には作家のキリスト教観があるという。なぜならカミュにとって、キリスト教の掲げる神の王国こそ、信仰の名の下に世界を否定し、人々を本来の生から背けさせ、退廃へと導く罪を隠しもつからだ。こう述べた後でコルビックは、かような作家の倫理的思索が偉大なモラリストたちの人間探求に通じるのだと強調する。

最後にコルビックは、「神なき世界、じつに神聖な世界」と題された結論において、カミュの逢着した帰結を以下のようにまとめている。作家が抱いた無神論的人間主義は3つの観点——神なき世界の構想を抱く方法である〈不条理〉、神なき世界で生を享受する方法である〈反抗〉、そしてこの世界に対処する方法である〈愛〉——に従って展開する。不条理とは、作家にとって不可避な出発点であり、哲学体系を構築するための材料でもあった。不条理に立ち向かう際に重視されたのは、あらゆる希望を排除し、いかなる逃避も認めない態度である。そして〈不条理〉の感情はデカルトの方法的懐疑に相似する機能を果たし、作家を反抗という価値の発見へと導く。不条理に対峙したとき、彼は信仰への逃避を拒絶しながら、道德の分裂と生の悦びの享受を選択する。しかしこのときカミュが直面したことは、人間は神の死に従えるか、また神と共に死んだのかという問題だった。そこで、ニーチェやマルクス、フロイト以来の道德——弱者の道德、支配階級の道德、超自我の道德——の人間主義やその価値の普遍性とは別の基盤の上に、人間や無制約者の正当性を構想する可能性を模索しつづけるのである。カミュの哲学的・文学的な試みとは、人間性を欠いたもの（不条理、虚無主義、怨恨、悪）を認識し、人間性（反抗、愛）を確立し、斬新な人間主義を示すことだった。人間を否定し苦しめる全てのものに対して、

個人の人間主義，集団の人間主義，宇宙秩序の人間主義を確立すること，これが作品の主導原理である。したがってカミュの無神論的人間主義は反抗と愛なのだ，と結論づけられている。

コルビックは「不条理・反抗・愛」の3つのテーマからカミュ作品の総体を見晴らし，優れたテキスト分析にあわせて，正鵠を射た哲学的分析をもなした。もちろんなによりの貢献は，コルビックがカミュ研究における最大のテーマ，不条理と反抗の問題分析のみにとどまらず，作家自身の死によって具現化されることなく終わった〈愛〉についての考察をも試みた点にあらう。神学者でもある著者が示した，無神論的人間主義にたいする分析は明晰で，作家の思想を理解する助けとなることは確実である。往々にしてカミュは哲学的無能という誹謗中傷を受け，不条理の表題のみで虚無主義者と見なされたり，実存主義の運動に結びつけられたりもした。しかしながらコルビックがおこなった哲学的分析は，今日的意義を失わない作家の正当性を我々に再発見させる。まさに本書はカミュの抱く真の世界像に迫る一書と言えるだろう。

註

- 1) Voir Roger QUILLOT, «Commentaires de *L'Homme révolté*», in Albert CAMUS, *Essais*. Édition établie et annotée par R. QUILLOT et Louis FAUCON, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1965, p.1610.
- 2) Arnaud CORBIC, *Camus, l'absurde, la révolte, l'amour*, Paris : Les Éditions de l'Atelier, 2003, 173 pp.